

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 演説でネツベンをふるう。
- 2 家族のアンピを心配する。
- 3 悲しいだろうとスイソクする。
- 4 ジユクレンした技を争う。
- 5 過ちを繰り返さない。
- 6 筆者の意図を読み取る。
- 7 類似品が出回る。
- 8 電車の車窓からの景色。

問二 次の文の中で、正しい使い方の語をア～ウから一つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 入場券の有効 (ア) 期間 (イ) 機関 (ウ) 器官 () を確認する。
- 2 過去の事実に (ア) 関心 (イ) 感心 (ウ) 歓心 () を持つ。
- 3 外国の首脳と (ア) 階段 (イ) 会談 (ウ) 怪談 () する。
- 4 カゼ葉が (ア) 聞 (イ) 聴 (ウ) 効 () く。
- 5 推理小説を (ア) 表 (イ) 著 (ウ) 現 () す。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈休日には絵本を一冊、ゆつくりと〉

これは子どものための心得ではない。私自身のための心得だ。いや、心得というより生活習慣と言ったほうがよい。八年前の五十代半ばすぎに次男を喪^{うしな}つてから、懐^{なつ}かしさもあつて書店の絵本コーナーに佇^{たたく}んだのがきっかけだった。感覚が敏感^{びんかん}になっていたのでろう。手に取った絵本の世界にすーっと入りこみ、物語性のある絵に魅^みせられたり、**一** 的な言葉が生き生きと使われていることに感動したりといった経験をすることになったのだ。本書の他のエッセイでも書いたことだが、人が本からどれだけのものを読み取るかは、その人の人生経験や内面の成熟にかかわっている。実際、若い頃に読んだ小説を、人生後半になって読み直すと、はじめて読むような新鮮^{しんせん}さを感じ、文章や会話の言葉にこめられた深い意味に気づくことが少なくない。絵本だって同じだ。絵本の言葉は、簡単でありふれたもののようにでありながら、絵の味わいとハーモニーによって、俄^{がぜん}然強く深い響^{ひび}きをもつて心を揺^ゆさぶつてくるのだ。

実際、息子たちが幼^{こども}かった頃に読んでやった『ちいさいおうち』や『おやすみなさい フランシス』や『ラチとらいおん』など、いろいろな絵本をあらためてサイドクしてみると、いまだに新鮮で深い味わいがある。そういう **二** 的な絵本は、人間がこの世に生まれ成長していく過程で出会う様々な問題について、決してお説教調ではなく、いわば暗^{あん}喩^ゆとしてのお伽^か喃^{なん}風^{ふう}に構成されているので、人生後半になって自分のために読む時には、作者の意図に思いをめぐらせながら、深読みのたのしみを味わうことができる。

三 発見したたのしみは、それだけではない。息子たちの成長とともに絵本から離れていた二十年余りの間に、すばらしい新作の絵本が実にたくさん出版されていたのを知ったのだ。**四** 折々にそれらの絵本を探し求めては、感動したり笑ったりしている。

ガブリエル・パンサンの『アンジュール』をはじめとする **五** 連^{れん}の作品や、モーリス・センダック、C・V・オールズバーグなどの作品群に親しむようになったのも最近のことだが、最近出会った翻訳^{ほんやく}ものの「この一冊」となると、ノルシュテインとコズロフ作、ヤルブーソヴァ絵、こじまひろこ訳の『きりのなかの はりねずみ』（福音館書店、二〇〇〇年）だ。

はりねずみは、夜になると大好きなこぐまの家に出かける。一緒に星をかぞえるのが大好きなのだ。手にはこぐまの好物の「のいちごのはちみつに」**六** をウツワに入れ、赤い水玉模様のハンカチーフに包んで持っている。途中、水たまりにウツ^うツ^つる星に感動したり、霧^{きり}の中に **七** 的な白馬を見たりする。怖いおばけも出てくる。霧が深く、足をすべらせて川に落ちてしまう。仰^{あおむ}向けになって流されるはりねずみは、こぐまへのプレゼントの赤い水

玉模様のハンカチーフの包みを、お腹の上にしっかりと持って離さない。その可憐な^{かれん}はりねずみの姿を、霧の中から岸辺に顔だけ見せた白馬のやさしい表情とともに描いたファンタステイックな絵に、私は完全に魅惑^{みわく}され、その絵を見るだけのために何度もその頁^{ページ}を開いたことか。はりねずみは、水中から現われた大きな魚に救われて、背中に乗せてもらう。無事こぐまの家にとどり着くと、ふたりで並んで座り、星^{なが}を眺める。はりねずみの想いを記した最後の言葉がいい。

「こぐまくと いっしょは いいなと おもいました」

こんな一見ありふれた言葉が、なんとみずみずしく、しかもあたたかく胸に響いてくることか。そこに^D絵本の力がある。物語の展開と絵と言葉とが相互^{そうご}に高めあい、愛の温もりをみごとに表現し切ったこの絵本は、今私の机の横に常に置かれている。

(柳田邦男「愛の温もりのファンタジー」より)

問一 〓線①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 一線X「折々に」・Y「二連の」の意味として適切なものを、あとのア～エからそれぞれ一つずつ選んで記号で答えなさい。

X 折々に

ア ぐうぜんに

イ 絶対に

ウ その時々

エ 早々に

Y 一連の

ア ひとつづきの

イ ときどきの

ウ 全体的な

エ 部分的な

問三 空欄「 」 目にあてはまる言葉として適切なものを、あとのア～カからそれぞれ一つずつ選んで記号で答えなさい。

ア 幻想 イ 現実 ウ 日常 エ 理想 オ 古典 カ 心理

問四 — 線A 「人生後半になって自分のために読む時には、作者の意図に思いをめぐらせながら、深読みのたのしみを味わうことができる。」とあるが、なぜそのようなことができるようになるのか、解答欄に合うように本文中より四十五字以内でぬき出しなさい。

問五 — 線B 「発見したたのしみは、それだけではない」とあるが、他にどのような楽しみがあるといっているのか、解答欄に合うように本文中より五字でぬき出しなさい。

問六 — 線C 『きりのなかの はりねずみ』とあるが、作者がこの本を選んだ理由としてあてはまらないものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 愛の温もりをみごとに表現しきった素晴らしい絵本だから。

イ やさしい表情とともに描いたファンタスティックな絵が魅力的だから。

ウ はりねずみの思いを記した最後の言葉がすてきだったから。

エ 喪った次男が好きな絵本だったので、懐かしく思っていたから。

問七 — 線D 「絵本の力」とあるが、どのような力か、本文中の表現をもちいて三十五字以内で答えなさい。

問八 「暗喩^{あんゆ}」とあるが、「暗喩^{あんゆ}」とは違い、「 のように」などと比喩^ゆであることがはっきりと分かる表現を何というか、答えなさい。

三

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

「おめえさ、車のライトに影かなんか映ったのを見間違えただけじゃねえのか？」ドスのきいた声でオトコナズンの坂口が言い放った。僕はギクツとした。

「おめえはビビリだからな、なんでも幽霊に見えるんじゃねえの」坂口はとどめをさすように言い、相棒の古田が「ガハハハ」と勢いよく笑った。

「みんなが見てなくても、阪野には見えるってことはあるだろう」と純情なマサトが味方についてくれたが、それも逆効果^Aだった。斉藤は笑い飛ばした。

「じゃあ、阪野が霊能者^Bってこと？ 阪野、おまえ、今まで何度も幽霊を見てるのかよ？ そんな話、一回も聞いたことないけどな」

「霊なんか何度も見てるよ！」と言いたかったが、本質的にまじめで気弱な性格は直っていない。僕は口を尖^①らせたまま黙^{だま}り込んだ。

すでに教室の雰^{ふん}囲^い気^きは一気にオトコナズンの側に傾^{かたむ}いた。そのとき、救世主^Bが現^あれた。

「あたしは阪野君のことを信じるな」と長谷川真理が言ったのだ。

「あたしのおじいちゃんに聞いたんだけど、昔あそこで若い女の人^Cが交通事故で亡くなったんだって。それであのお地藏さんをつくったんだって」

「おお……」とクラスの連中はどよめいた。長谷川は又木の子だが、誰とも分け隔^{へだ}てなく接^②する気^②さく^②な人柄^{ひとがら}で、男子からも女子からも人気がある。僕なんかとは桁^{けた}違いに信頼^②されている。

(一) 彼女はこぐりのすぐそばに住んでいて、そのおじいちゃんが言っているというのだ。僕だって、「えーっ」とのけぞった。あの地藏の前の木をほじくりかえしてクワガタを捕^とったりしていたからだ。知っていたら、そんな崇^たり^たが起きそうなことはしない。

長谷川の強力な援^{えん}護^ご射^し撃^{げき}で勝負はあっさり逆^{さか}転^{てん}僕^Cが勝^かち^ちをおさめた。話はあつという間にクラス中に広^{ひろ}まったどころか、他のクラスにまで飛^とび^と火^ひした。

「それ、ほんと？」と僕のところに直接^②やってくるやつもけっこういる。

人気者になったようで嬉しい。それに、何回も何回も繰り返^{くりか}し^し話^わして^ているうちに、自分がそれを見たことを確^た信^{しん}するようになってきた。その女の人が着^きていたコートの縫^ぬい^ぬい^ぬ目^めまではつきり目に浮^うか^かぶ^ぶのだ。

(二) 中には、「阪野、ウソ言^いってるんじゃねえの」と疑^うや^つも^もいる。そんなときにはギクツとした。一瞬^{しゅん}にして、女の人がぼわっとかすむ。

「ウソじゃねえよ、ほんとだよ！」僕が気色ばむとマサトが加勢してくれる。

「そうだよ、阪野がウソ言うわけねえだろ！阪野はそんなやつじゃねえよ」

マサトはいいやつだ。それが今はなんだか重い……。

いや、僕が何か見たのはほんとうだ。でもそれが女の人だったのかどうかになると自信がない。なにより肝心の部分が「ダメ」だった。

怖くないのだ。(目) 僕がほんとうにそれを見た、あるいは見てないにしても「何か感じた」のなら怖いはずだ。僕は人一倍怖がりなのだ。でも怖くない。つまりそれは、見た見ないを超えて、「ほんとうじゃない」のだ。

こぐりのところを通るのが億劫になってきた。自分がウソをついたのを毎回思い出すからだ。一人のときはこっそり遠回りして、「いっけん」の森を通って家に帰った。ところがそれを見ていた子がいたらしい。

「阪野はあの幽霊の場所が怖くて、一人のときはすぐ遠回りしてるぜ」なんていう話が広まって、ますます話が本物っぽくなってしまった。

そういうするうちに、わざわざ「こぐり」まで出かける連中が現れ、しかも「俺もあそこで幽霊見た」「あたしも見た」という子が続出するようになった。

ウソつけ、みんな注目を浴びたいだけだろ！と思ったが、もちろん何も言えない。僕のせいで、あろうことか、学年中に幽霊ブームが起こってしまった。

(高野秀行『またやぶけの夕焼け』より)

問一 線部①～③の本文中における意味として適切なものを、あとのア～エからそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

- | | | | | |
|------------|------------|--------------|------------|------------|
| ① 「口を尖らせた」 | ア 何も言えない様子 | イ ごまかそうとする様子 | ウ 不満の表情 | エ 驚きの表情 |
| ② 「気さくな」 | ア 親しみやすい | イ 平等精神のある | ウ リーダー気質の | エ 気弱な |
| ③ 「気色ばむ」 | ア 気落ちする | イ 気弱になる | ウ びっくりして悩む | エ 怒った様子になる |

問二 空欄「く目」に入る接続詞として適切なものを、あとのア～オからそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

ア それで イ しかも ウ だから エ だが オ もし

問三 ——線 A 「逆効果」とあるが具体的にどのような状態であるか、その説明に当たる部分の最初と最後の三字を抜き出しなさい。

(句読点を含む)

問四 ——線 B 「救世主が現れた。」とは、どういうことか。それを説明した次の文章の()にあてはまる適切な言葉を本文から抜き出し、指定された文字数で答えなさい。

・(三字)の(四字)で僕の話がクラスだけでなく、他のクラスにも(四字)から

問五 ——線 C 「僕が勝ちをおさめた」とあるが、僕の味方をした人物は誰と誰か、あとのア～オから選んで記号で答えなさい。

ア 斉藤 イ 長谷川 ウ マサト エ 古田 オ 坂口

問六 ——線 D 「それが今はなんだか重い」とあるがそれはなぜか、二十五字以内で説明しなさい。

問七 ——線 E 「ウソをついた」とあることについて、僕は「どこで、何をした」というウソをついたと考えられるか、答えなさい。

問八 ——線 F 「みんな注目を浴びたい」とあるがそれはなぜか、本文の表現を用いてその理由を答えなさい。

問題は以上です。